

# 語る 伝える

川崎医療福祉大 諏訪利明准教授(59) 岡山北區

自閉症の人たちの行動は、しばしば周囲を戸惑わせてしまう。誰かにあいさつをされても好きなキャラクターに目を奪われて、その人には見向きもしなかったり、会話の途中で思いもよらない方向に注意がそれてコミュニケーションが円滑に図れなかったり。

こうした特異に見える行動を取るのにはなぜだろう。生まれつきの脳機能障害が原因とされる自閉症の人たちは、そもそも物事を感じ方や捉え方が違う。大切なのは、自閉症の人たちの「学習スタイル」にどれだけ合わせた支援ができるかだ。それがうまくいけば彼らの理解は進み、行動面も変わっていく。

## 自閉症の人は捉え方が違う。学習スタイル合わせた支援を。



諏訪 利明

学習には視覚的な情報の提供が有効だが、それだけでは十分ではない場合もある。

自閉症の人は計画を立て、見通しを持って取り組むのが苦手なので、分かりやすいように予定表を作ったりあげることがある。ところが、ある男児に青、黄、赤で色分けした予定表を渡すと、即座に紙を裏返して「ルーマニア」と書いたという例がある。男児は予定表と理解できず、ルーマニアの国旗と捉えてしまった。目の付け所が支援者の意図と全然違ったわけだ。

このように、学習スタイルは共通性があっても、細かい部分では一人一人異なり、できないできないの凸凹もある。それぞれの人が何

に興味を示すか、どういう時にうまくいき、逆に失敗するか、といったことをつぶさに観察し、特性をよく理解した上で支援の方法を考える必要がある。

自閉症の人への支援には、さまざまな方法が既にあるので試してほしい。うまくいかないことも多いだろうが、自閉症の人たちは学習スタイルが自分に合えば、とてもよく学ぶ。「治

す」のではなく、彼らの力をどう引き出すかという発想で、諦めずにじっくり向き合う姿勢が大切だ。

彼らは自分の特性を理解し、分かりやすく教えてくれる人たちに会えるのをきつと待っていると思う。そういう存在が今後増えていくことを、支援者の一人として心から願っている。

自閉症児の療育支援に当たるNPO法人・星とたんぽぽが、9月27日に岡山市内で開いた講演会の要旨。

記者の一言

諏訪准教授は、自閉症の人たちの特性を「独自の文化」とも表現した。一見特異に映るさまざまな言動。その背景に、当事者ならではの理由があることをきちんと理解していなければ、彼らの力を引き出すことは

できない。大事なのは、すぐに相手を拒絶するのではなく、まずは知ろうとする姿勢を持つことだろう。専門家ではなくても、そんな隣人が地域に増えていけば、自閉症の人たちが持つ文化はもっと豊かになるはずだ。

(安部晃将)